日本語・日本文化研修プログラム「体験しよう！京都」
―１年目の成果と課題―

浜田　麻里
（京都教育大学）

Appraisal of the Experiencing Kyoto Program at K.U.E.
－Outcome from the First Year－

HAMADA Mari

2010 年 11 月 30 日受理

抄録：京都教育大学では，平成 21 年度より新たに「日本語・日本文化研修プログラム『体験しよう！京都』」を設置した。本稿では，新たに設置されたこのプログラムの成果と課題を総括する。このプログラムは，(a)授業科目，(b)個別研究，(c)インターンシップ実習の３つの活動を中心としたプログラムである。

プログラムの評価は，日研生，指導教員，インターンシップ受け入れ団体職員へのインタビューに基づいて行われた。いずれからも高い評価を得たが，一方，授業科目や一般学生との交流については課題が明らかになった。

キーワード：日本語・日本文化研修留学生プログラム，インターンシップ，自己肯定感，地域連携

Ⅰ．はじめに

京都教育大学（以下，本学）では以前より文部科学省奨学金による日本語・日本文化研修生の受け入れを行ってきたが，平成 21 年度より新たに「日本語・日本文化研修プログラム『体験しよう！京都』」を設置し，留学生受け入れ体制の充実を図ることとした。

本稿では，新たに設置されたこのプログラムの１年目の成果と課題を総括することにより，今後のプログラムの改善に資することを目的とするものである。

Ⅱ．日本語・日本文化研修留学生プログラムの概要

1. 日本語・日本文化研修留学生プログラムとは

日本語・日本文化研修留学生（以下，日研生）プログラムとは，日本国内の各大学に設置された研修コースで，日本事情，日本文化の理解の向上のための教育を受けることを目的としたプログラムである（文部科学省 2009）。

応募には，渡日及び帰国時点で外国（日本国以外）の大学の学部に在学し，日本語・日本文化に関する分野を専攻していることが資格となっている。いわば，将来日本語・日本文化のスペシャリストとして出身国と日本の架け橋となって活躍する人材を養成するためのプログラムである。

世界各国から招聘された学生は，日本政府（文部科学省）から奨学金を受け，１年未満の期間で日本の各大学に滞在して研修を受ける。各大学は，それぞれの特色を生かしたプログラムを設置しており，候補者は日本語能力及び専門研修希望等に応じて，各大学に配置される。

2. 本学での日研生受け入れ

本学では，平成 20 年度までは，日研生のための特定のプログラムを設定せず，学生一人一人のニーズに応じた指導を指導教員と学生とが相談しながらデザインするという方法で受け入れを行ってきた。日研生の中には，在籍大学に伝統ある日本語・日本学のプログラムがあり，日本で過ごす１年間について，卒業研究のためのデー

タ収集等，明確な目的と計画を持って来日する者もある。本学の自由なあり方はそういった学生達には歓迎されていたのではないかと思われる。

しかしながら，文部科学省からプログラム設置の要請もあり，平成 21 年度からはプログラムを設置した受け入れを行うこととなった。近年，１年未満の期間で日本に留学する「短期留学プログラム」が多様化し，主として英語で行われる英語プログラムだけでなく，日本語もあわせて学ぶことのできるプログラムが多くの大学の設置されるなか，国費で日本のスペシャリストを養成する日研生プログラムとしては，さらなる差別化と独自性が社会的責任として問われるようになってきたのである。

本学が位置する京都は，世界遺産に代表される伝統文化と京都駅ビルの建物に代表される先端科学とが交錯する街である。また，外国籍市民も多く在住し，多文化都市としての長い歴史を持つ。こういった京都ならではの特色をプログラムに盛り込めば，個性あるプログラムを開発することができる。

こうして，平成 21 年度から新しい日研生プログラム「体験しよう！京都」がスタートすることとなった。

3.「体験しよう！京都」の概要

（1）プログラムの目的

本学の「体験しよう！京都」は以下のような目的を掲げている。

> 教育は文化であり，文化は教育によって継承されます。「体験しよう！京都」は，教育を切り口に日本を体験的に理解することを目的としたプログラムです。（本学作成コースガイド）

教員養成系大学であることは本学の第一の特色であり，プログラムの設置に当たっては，その特色を前面に押し出すことにしたわけである。

（2）プログラムの内容と修了要件

プログラムの活動は大きく３つに分けられる。(a)授業科目の履修，(b)個別研究，(c)インターンシップ，の３つである。修了要件は以下の通りである。

(a)授業科目の履修	日本語科目		4 単位
	必修科目（「世界の教育Ａ」「世界の教育Ｂ」）		4 単位
	選択科目	カテゴリー「言語・言語教育」から	4 単位
		カテゴリー「文化・芸術」から	4 単位
		カテゴリー「開発教育・国際教育」から	4 単位
(b)個別研究			
(c)インターンシップ			

以下，それぞれの活動について，簡単に説明していく。

（3）授業科目の履修

授業科目としては，日本語科目，留学生科目である「世界の教育Ａ」「世界の教育Ｂ」の履修の他，一般学生向けに開講されている科目をそれぞれの日研生の興味に応じて選択して履修することとした。

教員養成大学である本学では，さまざまな領域の専門科目が開講されている。その領域の幅広さは単科大学でありながらあたかも総合大学であるかのような様相を呈している。この選択科目の幅広さは本学の特色の一つと言えるだろう。

一方，日研生の興味はどうしても日本語，日本文学に偏りがちで，その面から言えば，本学には日研生達の興味に直結する授業科目は多くない。しかしながら，このプログラムではあえてカテゴリー別に分けて，選択科目を設定した。それは，日研生に幅広い分野の授業を履修してもらうためである。一見普遍的に見えるような科学や数学のような学問領域においても，課題意識のあり方，知識や技術を伝達する方法，学習者の反応，教育観など，授業のあらゆる側面に文化の影響は現れている。日本語と全く関係のないように見える外国語科目ですら，日本人の言語観，外国語学習観を反映している。したがって，日研生が幅広い分野の授業に参加すれば，日本の大学人や若者のメンタリティを自分なりの視点から理解することが可能になるだろう。

以上のような背景により，日研生は３つのカテゴリーからそれぞれ科目を選択して履修することとした。

なお，選択科目をリストアップする際には，全専任教員に呼びかけ，留学生の学修に適した科目を推薦してもらった。

（4）個別研究

個別研究では，日研生が自分自身でテーマを設定して，専門分野の研究を行う。受け入れ指導教員が個別研究を指導する。最終的に，研究内容をレポートにまとめ，提出する。

（5）インターンシップ実習

新しいプログラムを「体験しよう！京都」と命名したのは，インターンシップにプログラムの中で大きな意味を持たせようとしたためである。

インターンシップ実習では，地域で行われているボランティア活動などに参加したり，自分で計画を立てて地域との交流活動を行う。活動内容は定期的に報告するほか，最終的には「活動報告書」としてレポートにまとめて，提出する。

京都は地域における国際交流活動の活発な街でもある。留学生がそういった地域の活動に参加することを歓迎される雰囲気が大いにある。そのような地域の特性を活かすため，この活動を設定し，大学人以外の多様な人々と積極的に交流を行う機会を確保することとした。せっかく日本に来たのであるから，メディアを通しては得られない生の日本を体験的に学んでもらうことが目的である。

Ⅲ．プログラムの評価

1．日研生へのインタビューから

まず，プログラム全体への評価を得るため，日研生に面接によるインタビュー調査への協力を依頼して実施した。

帰国時期の関係で，実際にインタビューへの協力が得られたのは２名の日研生だけであった。面接は筆者自身が，他に人のいない静かな場所で行った。

インタビューに当たっては，大まかな質問は予め設定していたが，日研生には，質問にこだわらず自由に思ったことを話すように促した。

内容は本人の許可を得て録音された。面接時間は 30 分程度である。

以下には，インタビューの中から，プログラムに直接関係のある部分に絞って要約した内容を掲げる。

（1）日研生Ａ

日本に１年間住んでみることができてよかった。日本語授業は足りないが，日本語の勉強は国でもできる。他の授業の方が役に立つ。国費で留学した学生は，帰国後，１年間，自分で習ったことを後輩に伝える授業をすることになっている。そのためのヒントもいろいろもらった。

インターンシップは今回のプログラムでいちばんよかった。大学では日本人とはあまり仲良くなれない。インターンシップによって他大学の日本人学生といっしょにイベント企画をして，仲良くなることができた。出身国でもボランティアをしていたので，比較することもできた。日本では半年以上前から，細かいところまで前もってよく準備する。出身国ではそれはない。せいぜい１ヶ月か２ヶ月前から準備を始めるので，前の日には余裕がなく大変。

大学の中ではあまり友達ができなかったが，インターンシップがあったので良かった。大学で自分から友達になろうと努力したが，だめだった。サークルに入ればいいかもしれない。授業では話すチャンスがない。

他の大学に行った学生に聞いたら，プログラムはもっと楽だったようだ。留学生だけの授業で，個別研究の中間発表もなかったそうだ。ただ，中間発表はあった方がよい。学生はなんでも先延ばしにするし，途中でいろいろな先生のコメントをもらうことができたのでよかった。出身国でも卒業論文の中間発表会があったらいいと思う。

インターンシップの定期報告は，大変だったが，書く作業を通して自分でも活動のふり返りになってよかった。

日研生の中には，プログラムは難しすぎるという意見の人もいるが，私はちょうど良いと思う。後輩に宣伝す

るとすれば，日本人と同じ授業が受けられることやインターンシップが良いことを宣伝する。

（2）日研生Ｂ

このプログラムは１年間のプログラムで，日本語が上手になり，日本人と接して文化に親しむプログラムだと聞いていた。とても勉強になった。

日本人と一緒に出席した授業は難しかった。先生はやさしかった。課題をまちがっても許してくれた。漢字が難しかった。授業で理解できたのは 50％ぐらい。内容は全ておもしろかった。

個別研究はスムーズに進んだ。後半になると忙しくなると思い，レポートのほとんどは，春休み中に書いた。そのおかげで夏休みに時間をとっておくことができ，有効に使えた。

チューターは付いていたが，あまり会っていない。

指導教員がときどき見学に連れて行ってくれた。その時はチューターも一緒に行った。ふだんはチューターとは関わりはなかったが，個別研究のためにアンケート調査をするとき，チューターに手伝ってほしいと思った。知り合いに配ってほしいと言ったが，自分でやった方が勉強になるからと言われた。仕方なく，インターンシップの仲間に頼んだ。

2. 指導教員へのインタビューから

日研生と同様，指導教員にも面接調査を行った。方法は日研生への面接とほぼ同じである。２名の指導教員へのインタビューの概要を以下に掲げる。

（1）指導教員Ｃ

以前，研究生の受け入れでよくない経験をしたことがある。今回は留学期間も留学目的も明確だったので，集中して勉強できていたと思う。日研生と自分は専門分野がちがうので，自分の授業は受けていない。個別研究のみについての関わりだった。個別研究のテーマの設定のときに話した。あとは自分で書いたものをときどきもってきて読んでほしいと言われた。

チューターとは週２回ほど会っていたようだ。チューターの友人との関わりもあった。日研生の方から，もっと友人を呼んできてと言われたらしい。チューターがきっかけで日本人の学生は留学生と交流が持てた。学生の集まる部屋に連れていっても，そこで知り合いになるのは難しい。

彼らにとってのこのプログラムは本学の学生の教育実習のようなものだと思う。人生の転機ということではなく，「日本語を勉強したから日本に来る」というような，自分の定めたコースの中の一部として来日して勉強していたという感じ。留学生ばかりの研修コースに入るよりは，本学のようなプログラムの方が日本の学生との接触もあったのではないか。

日研生の受け入れは，本学の学生にとって意義があると思う。外国人と接することに興味のある学生は多い。機会があれば，ちょっと話してみたいという学生はけっこういる。チューターなど依頼されれば刺激を受ける。せっかく日研生を受け入れるなら，本学の学生に刺激を与えてほしい。

学生自身に他の学生を巻き込む立場に立たせるとよいと思う。授業だけで仲良くなるのは難しい。発表の準備など，授業時間外に集まって共同作業ができるような課題を与えると効果的なのでは。

個別研究のテーマは非常に専門的。ただ，だからといって一部の教員に負担が集中しないように，いろいろな学科の教員が協力できる体制になるとよい。個別研究の中間発表会は非常に良かった。研究生達にもこういった課題を課すと良いのでは。

（2）指導教員Ｄ

指導教員だが研究指導はしていない。一緒に京都市内の見学に行った。チューターと指導学生を誘ったら，他の日研生も一緒に行くことになった。

これまでは学生時代にチューターをしたことはあるが，大学院生だったので研究への支援だった。

今回，日研生本人は専門分野の学習を希望していたが，関心はあっても基礎的な知識はない。留学の第一の目的は日本語を伸ばすことのようでもあったので，特に専門の指導はしなかった。チューターにレポート執筆の補助をするように依頼した。ときどきは会ってご飯を食べたりしていたようだ。チューターと一対一のつきあい以外は難しい。ゼミに出てもらおうと思ったが，日本語や専門知識の問題で難しい。見学に行くときに，チュータ

ー以外の学生も誘ったが，本学の学生は非常に忙しい。土日もバイト，授業，部活が入っている。それが日本人学生と日研生が交流を持ちにくい原因だと思う。

日本語能力も高く，日本語についてはレポートでも指導する必要がなかった。日本の学生よりよく勉強している。授業は難しかったと思う。一般学生は小学校からずっとならっていることが前提なので，日研生はついていけない。中学校の教科書を使って，さらに深めることをしていたが，教科書を読むだけで精一杯だった。

日研生達は全体に優秀なので，本学の学生達が刺激を受けることができればと思う。日研生だけでまとまって行動していたのも問題だったかもしれない。

授業については，自分の授業以外の授業でも本当についていけているのか疑問に思った。先生は授業に出ているから大丈夫と思っているかもしれないが，本人は全然わからなかったと思っているのではないか。授業が苦痛になっていないかというのが気になった。留学生に合わせて授業をすることはできないので，留学生専用の授業があるとよいと思う。

3. 成果と課題

プログラムについては二人の日研生とも高く評価をしている。

（1）授業について

本学では「教育を切り口として日本文化を学ぶ」という目的を掲げているため，あくまでも教員養成課程の学生と同じ授業を受けることを前提としている。他大学では日研生プログラムを留学生センターや国際教育センター等が運営している場合が多く，例えば 10 名程度の日研生を集め，日本語集中研修や特別授業を実施している事例も多く見られる。本学では，いまのところ，現実問題としてそのような受け入れ体制の整備は難しい。しかしながら，日本人と同じ授業に出席することは，非常な困難を伴うものの，日本人と同じ授業を受けてもなんとかやっていけるという自信を日研生に与えているという側面もあるようだ。

しかしながら，指導教員Ｄが指摘するように，授業の内容が実質的にどの程度修得されているのか，またわからない授業に出続けることが精神的苦痛になっていないか，等は今後注意して見守っていく必要があるだろう。留学生向けの授業の設置は困難ではあるが，今後も検討課題としたい。

また，一般学生と同じ授業に出席していても，一般学生との交流はほとんど行われていないことも見逃されるべきではない。指導教員Ｃが提案するように，授業外の作業を共同で行う課題を与えることなどは，ぜひとも実践してみたい試みである。

（2）個別研究について

今回の日研生は研究能力も高く，自律的に研究を進めていた。研究指導については，日研生からも指導教員からもとくに問題点は指摘されていない。中間発表などの機会を通じた集団指導もうまく機能していると評価できる。

（3）日本人学生との交流について

日研生に限らず，多くの留学生にとって日本人学生との交流は大きな課題である。指導教員によればチューターを活用することによって少しでも国際交流に興味のある学生を巻き込むことが期待できそうである。

一方で，本学学生の多忙が日研生との交流の妨げになっていることも指摘された。この状況は，本プログラムだけの問題ではない。学部全体として教員養成の在り方を考え直す議論の中で，是正が検討されるべき課題であろう。ただ，多忙な学生であるからこそ，チューターなどの制度をより積極的かつ効率的に利用していく工夫も今後求められる。

Ⅳ．インターンシップについて

「体験しよう！京都」が特に従来のプログラムとは異なる特色として掲げているのは、インターンシップである。留学生がプログラムの一環として長期間，地域の活動に参加することはこれまでの本学の留学生対象プログラムでは例がなかった。

平成 21 年度については、４名全員が近隣の地域団体が主催する活動にボランティアスタッフとして参加する

ことをインターンシップ活動として認定した。

上で紹介した２名の日研生は，プログラムの中でインターンシップがもっとも有意義であったと述べている。なぜインターンシップが有意義だと感じたのか。インターンシップにはどのような意義があったのか。

以下では，日研生達にとってインターンシップがどのような学びの体験として機能したのかを，日研生のレポートから探ってみる

1. 日研生のレポートから

レポートは，インターンシップ終了後，活動報告レポートとして提出されたものである。レポートの中から，まず，実際にどのような活動を行ったのかをまとめる。その後，各自のレポートでインターンシップでの成果に言及した部分を要約して以下に掲げる。

2. インターンシップにおける活動概要

日研生が参加したプロジェクトは，外国人や外国にルーツをもつ人達と，日本人との交流を活発にすることを目的としたプロジェクトである。レポートから１年間にプロジェクトで実施された行事を挙げると以下のようになる。

12 月	クリスマスパーティー
3 月	多文化祭
5 月	新規スタッフ説明会
6 月	スタッフ交流会
7 月	浴衣・お茶席体験
8 月	開発途上国の孤児支援のためのチャリティーイベント
	宿泊プログラム

このうち，8 月に実施されたチャリティーイベントについては，新聞紙上でも紹介された。

これらの数多くのイベントを企画，運営するため，スタッフは毎週１回集まってミーティングを行っていた。日研生はこれらイベントの全てに参加し，積極的に役割を担っていた。

3. 日研生の学び

以上のような活動を通して日研生は何を学んだのだろうか。一人一人のレポートから紹介する（一部，読みやすさを優先して，表記や表現を改めてある）。

（1）日研生甲

普段は大学生活の中では会うことのできない他校の学生や社会人，留学生に出会い，自分の日本語を思い切り伸ばすことができた。また，普通の日本語運用能力だけではなく，自分の考えていることを論理的に述べ，相手を説得するなど，経験なくして身につかないスキルが身についた。

日本の文化や社会に対する理解も深めることができた。教科書やメディアを通してではなく，身をもって経験することができた。日本人はみなきっとこうなんだろうなというステレオタイプからも抜け出すことができた。後輩達に，素晴らしい経験は自分で開拓していくものであると教えてあげたい。

（2）日研生乙

イベントで子どもや年配の方など，普段話す機会があまりない人達と出会えた。友達同士ですることが多くない異文化理解などのまじめな話を日本人として，日本人の考えを知る機会になった。活動を始める前に期待していたのは，日本文化の理解が深まることだけだったが，日本だけでなく，中国人スタッフやイベントの参加者から他の国の文化も紹介してもらった。スタッフとしてボランティアのつもりで入ったにも関わらず，私の方が勉強させてもらったと思う。

日常場面で母語話者によって自然に使われている日本語を聞くことが増えた。語彙も増えた。しかも，日本語が上達しただけではない。私の完璧ではない日本語でも，なにかができることがわかり，自信につながった。

（3）日研生丙

インターンシップ実習のおかげで，日本人の方々と共に，日本社会で様々なことを行ったおかげで，日本の社会に溶け込んだ。それはあたかも，外国人としてではなく，日本人の一員として，という一体感を持ったものだった。活動中はずっと日本語を使っていたため，日本語の能力は伸びたのではと思う。

ボランティア活動を始めてから，多くの日本人やその他外国人と出会い，知見を深めることができたため，視野が大きく開けた。同時に，ボランティア活動の経験はなかったが，イベントなどを自分でイメージしてマネージできるようになったと思う。このプロジェクトでもっと強く確信したことは「みんな違ってみんないい」という境地だ。

（4）日研生丁

日本では計画を立てるのはけっこう時間がかかると感じた。どんな活動でもいろいろなひとがいて，例えばＡさんは遅くまで意見を出さないが，Ｂさんはすぐ意見を出したりする。そうすると，みんなまた改めてＢさんの意見を考える。また，Ｃさん，Ｄさんがいて，またＣさんとＤさんの意見を聞いて，あらためて考える。なぜ一つのイベントの計画を３ヶ月あるいはもっと前から考え始めるかがわかった。自分の国では，積極的な人はある程度何かを決めてしまってからみんなに言う。どっちがいいかはっきり言えないが，みんなの意見を聞くのは大事だなと思った。

来日するまでに，日本人は時間を守る，日本人は責任感があるなどという話をよく聞いた。実際には日本人もいろいろいると思った。ミーティングに遅れてきたり，欠席したり，メインスタッフとして入ったのに行方不明になってしまった人もいた。日本人は恥ずかしがりで，自分が思っていることははっきり言わないという話も聞いたが，積極的で思っていることを直接言う日本人にも出会った。異文化理解はけっして簡単なことではないと思った。ものごとの表面だけ見ていた私にとって，考えさせられることがよくあった。

（5）まとめ

研修生の学びをまとめてみると，以下のようになる。

(i) 日本語能力の伸長（現実に使われているさまざまな日本語，論理的に意見を述べる力，など）
(ii) 日本人や日本社会に対するステレオタイプからの脱却
(iii) イベント企画などのマネージメント力の養成
(iv) 日本社会の一員という感覚をもつことができた
(v) 自分も日本語でなにかできるという自己肯定感が持てた

2. 地域団体から

（1）地域団体からの協力

インターンシップが実現できたことには地域団体からの協力が得られたことが非常に大きい。日研生達が参加したプロジェクトの情報提供から，プロジェクトへの受け入れ，活動中のサポート，折に触れた活動の様子の情報提供など，当該団体には大変感謝している。

この団体の職員の方にもインタビュー調査を行った。インタビューは団体の事務所で実施した。方法は，日研生，指導教員へのインタビューとほぼ同様である。

（2）団体職員へのインタビューから

みんな活き活き活動していた。毎週ミーティングがあるが，ミーティングそのものが異文化交流の場になった。日本人の学生にとっても，その他の留学生にとっても，いろいろな国から来ている仲間がいることが刺激になった。よい場になっている。日本人がいるから日研生も来る。お互いのニーズが噛み合っていた。

京都は地域の国際交流団体が多いので，団体の活動としての独自性を出すことが求められているが，このプロジェクトは，学生達が自分で企画して実行することが特色。これは大きな意義がある。日研生達がいることが刺激になってどんどんスタッフが増え，ネットワークが広がっている。

プロジェクトは毎年４月からスタートするので，今回の日研生は途中から参加したことになり，はじめは様子がわからなくてぼーっとしていた。しかし，すぐクリスマス会があり，スタッフとして否応なしにさまざまな役割を分担して，主体的に動かなければならなくなった。それがよかったのだと思う。それまでは受け身でやっていたのが，イベントをやってみることで自分でもできることがある，という自己有用感につながったのではない

か。プロジェクトとしても，日研生が入って活性化した。自分はこういうことがやりたいとはっきり言ってくれるし，日本語力も高いので，細かい議論まで日本語でできることも大きい。

（3）まとめ

さきほどの日研生の記述と合わせて考えてみると，以下のような点が成果を支える要因として浮かび上がってくる。

(i) 日研生達の存在は日本人スタッフにも刺激になった。その刺激によって日本人スタッフのモティベーションが高まり活動を活性化させ，それがまた日研生自身のモティベーションを高めることにもつながる，というよい相乗効果が生じたこと。

(ii) 当該プロジェクトでは受け身の参加ではなく，全員が役割を担って活動に参加することを求めていること。それが日研生達の自己肯定感を生むことにもつながったこと。

(iii) インターンシップ研修を成功させるためには一定レベルの日本語によるコミュニケーション能力が必要であること。必ずしも日本語の運用能力が高い必要はないが，日本人スタッフと議論ができる基礎的な能力は，最低限必要である。どのような留学生でもインターンシップから多くを学び取れるわけではない。もし日研生自身の日本語運用能力が低い場合は，日研生の言いたいことをうまく引き出してくれる寛容さとコミュニケーション能力が日本人スタッフ側に求められるだろう。留学生を受け入れてくれる団体との連携を，プログラム運営者としては，つねに考える必要がある。

Ⅴ．終わりに―プログラムの成果と課題

以上，新しい日研生プログラム「体験しよう！京都」の一年目の実践を振り返ってきた。成果と課題は次のように整理できるだろう。

1. プログラムの成果

まずインターンシップへの参加や指導教員の積極的な働きかけにより，大学内外の日本人と関わり合いをもつことができ，日研生の日本語能力の伸長や日本理解の深化をもたらすことができた。とくにインターンシップでは，ただ一緒に遊びに行くだけではなく，共同作業を通じて互いに深く関わり合うことができ，ステレオタイプの打破にまでつながるような交流が産み出された。

またインターンシップでのイベント企画の体験などを通じて，不十分ながらも日本語を用いて日本社会の中で自律的に機能していくことができる能力と自信を養うことができた。これは将来のキャリア形成のために，非常に意義深い体験であったと評価できるだろう。

2. プログラムの課題

一方で，課題も明らかになった。まずは授業科目の改善である。授業は日本で生まれ育った一般学生の知識量を前提として行われる。日研生が圧倒的に先行知識が少ないことは事実であり，１年間の研修でその穴を埋めることは現実的にほとんど不可能である。しかしながら，日研生が履修する科目の担当教員に，留学生にとってわかりやすい授業の在り方についての情報の提供を行うことで，少しはわかりやすく，日研生も参加できるような授業に近づいていくだろう。

インタビュー協力者の日研生が次のように漏らした。「留学生が多い授業なのに，留学生の出身国について『どこにあるのか？』という質問を授業担当教員から受けた。留学生を教えるなら，それぐらい自分で調べておいてほしいと思った。」各教員が多忙を極める中，多大な負担が教員にかかることは避けたいが，留学生が「自分は歓迎されている」という気持ちが持てるようにするにはどうすればよいか，多くの教員と認識を共有することが求められている。

また，インターンシップについては，今後も地域の諸機関との連携を通じて，日研生が地域社会において活動できる機会をできるだけ多く確保することが求められる。また，一般学生と日研生との交流を活性化するために，学内でも日研生と一般学生の共同を促すような機会を創出していく必要があるだろう。その際には，日研生の主

体性の発揮を促すような工夫が必要であることが今回の実践から示された。

「体験しよう！京都」の２年目の実践はすでに始まっているが，今後もプログラムの充実を目指し改善を重ねていきたい。魅力あるプログラムによって多くの日研生を本学で受け入れることは，インタビューに協力してくださった指導教員のみなさんがおっしゃっているように，最終的には本学の一般学生が多くの刺激を受け，国際的な感覚を身につけた教員として現場に立つことにつながっていくのである。

謝辞

プライバシー保護のため，実名を載せることができませんが，インタビューにご協力くださった日研生，指導教員の先生方，地域団体職員の皆様にこの場で改めて感謝の意を表します。

参考文献

文部科学省(2009) 「2010 年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生　日本語・日本文化研修留学生募集要項」 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1288250.htm （2010 年 11 月 29 日参照）